

ロマン主義者シューマン

小原 裕之

音楽におけるロマン主義とは一体どのようなものだろうか。多くの日本人は、抒情的で表情豊かな旋律美、借用和音や非和音を多用した色彩豊かな和声、重厚で大規模な管弦楽法、といったものを真っ先に思い浮かべるのではないだろうか。

しかし、これらははたしてロマン主義音楽の本質なのであろうか。

そもそも、ロマン主義音楽とは何なのだろうか。

18世紀の古典派音楽の時代は、同時に啓蒙主義の時代であり、人間の理念や理想が叫ばれた時代であった。また、一方では「自由・平等・博愛」を理想とするフランス革命が起り、その思想はナポレオンの旋風とともに、欧州全土に波及するかに思われた。

当時の知識人、特にドイツ人たちは、統一された祖国をもつフランス人に大きな憧れをもっていたし、フランス革命の掲げた理想に大きな期待を寄せた。ヘーゲル、シラー、ベートーヴェンといった人々はこの世代である。例えば、ベートーヴェンの《英雄交響曲》などは、こうしたフランス革命の理念に対する期待故に生み出された作品とっていいだろう。

しかし、1815年の「ウィーン議定書」発行によって、この期待は裏切られることとなる。「ウィーン議定書」採択の結果出現した「ウィーン体制」は、王政復古と封建主義復活を標榜する政治体制であり、自由主義的、共和主義的な思想、そしてプロイセンやハプスブルク家、カトリック教会に批判的な思想への厳しい弾圧を行なった。

ロマン主義音楽とは、フランス革命への期待と、ウィーン体制の厳しい弾圧の反動が、その背景にあるのではないだろうか。芸術家たちは、フランス革命に見た理想を、人間の内面と心の中に求めたのではないか。故にロマン主義音楽は、自己の内面を吐露し、人間の感情や生き様を描くものになったと筆者は考える。また、それゆえにロマン主義音楽は、その題材も内容も、極めて個人的なものが多いのではないだろうか。

まさに、そういう意味でローベルト・シューマンはロマン主義者であると言えよう。

特に、シューマンという人は、「オイゼビウス」「フロレスタン」「ラロ先生」という三人の人物による架空の対談・討論という形での評論を見ても、極めて夢想的な性格であったことがわかる。そのようなシューマンが、ウィーン体制下のヨーロッパで、自己の内面に深く沈溺し、それをえぐるような音楽を作曲したのは納得出来るだろう。

シューマンはもともとピアニストを目指しただけあり、第一にピアノ音楽の作曲家であるが、当初文学者を志したことからも、同時に歌曲の作曲家でもあることは衆目の一致するところである。

1840年はシューマンの「歌曲の年」と一般に言われているが、この年はシューマンが長

年の恋人であったクララと遂に結婚できた年であり、それまでもっぱらピアノ曲ばかり書いていた彼が、せきを切ったように 100 曲を超す歌曲を作曲した年である。歌曲集《ミルテの花》作品 25 は、結婚前夜のクララに贈った歌曲集であり、まさにこの「歌曲の年」を象徴するような作品である。

曲集冒頭に置かれている〈献呈〉は、東洋学者でもあったフリードリヒ・リュッケルトの詩によるものである。恋愛を通して、宗教的ともいえるような自己の高揚を謳った詩に、シューマンは高揚感をもちながらも、特に中間部においてコラルのような効果をもった音楽を作曲した。

〈くるみの木〉は、同じく《ミルテの花》の第 3 曲である。ユリウス・モーゼンの抒情詩に、シューマンは可憐な曲を付けた。乙女の将来について秘かに噂し合うくるみの木の花たちを描写したこの作品は、シューマン初期の傑作として、特に女声歌手によって好んで演奏される。

《ミルテの花》は全 26 曲からなっているが、その終わり近く第 24 曲におかれているのが〈君は花のごとく〉である。詩は、シューマン歌曲最大の詩人ともいえ、またドイツ・ロマン派抒情詩の大家であるハインリヒ・ハイネの作品である。わずか 20 小節の曲ながら、複雑な和声進行、非和声音の多様、前打音の使用など、シューマンの音楽の特徴が凝縮されていると言えよう。

シューマン最初のバラード〈ベルシャザル王〉は、旧約聖書「ダニエル記」に基づいたハインリヒ・ハイネの詩による。作品番号は 57 となっているが、実際には 1840 年の早い時期に書かれた作品である。

史実におけるベルシャザルは王ではなく、新バビロニアの王ナボニドゥスの子で摂政、あるいは共同統治者であったようだが、「ダニエル記」においては、ベルシャザルは新バビロニアの王とされている。「ダニエル記」によるとベルシャザル王は悪政を敷き、専横の限りを尽くし、また偶像を崇拜し、エルサレムのエホバの神殿から略奪した財宝を肴に大宴会を催したところ、壁に手が現れ、文字を刻んだ。これを解読したのが預言者ダニエルで、その文字「メネ・テケル・ウ・パルシン」は神が王の治世を測り、終わらせる、という意味であった。ダニエルはベルシャザルによって地位を与えられたが、ベルシャザルはその夜殺害された。

ハイネの詩にはダニエルは登場せず、詩の描写はベルシャザルの宴会と王の傲岸さを強調する内容となっている。シューマンはこれにきわめてドラマティックな音楽を付け、ベルシャザルの饗宴を生き生きと描き出した。一方で主題を刈り込み、中心的な主題に絞り込んで作品を構成したため、非常に骨太で引き締まった作品となった。

シューマンはその生涯に約 300 の歌曲を作曲したが、そのうちで代表作といえば、真っ先にその名が挙がるのが《詩人の恋》作品 48 であろう。「歌曲の年」1840 年の 4 月から 5

月にかけて作曲された。詩は、ハインリヒ・ハイネの有名な詩集『歌の本』に収められている「抒情的間奏曲」から取られている。シューマンはその中から自分の好みと趣味に基づいて 16 篇を選び、作曲した。「詩人の恋」(Dichterliebe) というタイトルはシューマン自身の命名である。

《詩人の恋》はその緊密な構築性(第 12 曲の後奏が終曲で回帰するなど)、シューマンらしい色彩豊かな和声、豊かな楽想、ピアノ・パートの充実、いずれをとってもシューマンの代表作というにふさわしい作品である。

《詩人の恋》は、一人の青年が恋をして、失恋し、その恋を克服するまでを描いた作品である。詩には具体的なストーリーが描かれているわけではないが、そのような筋書きが存在する。

《詩人の恋》は、ストーリー性の希薄な《リーダークライス》や《ミルテの花》と異なり、「連作歌曲集」(Liederzyklus) である。

シューマン以前の連作歌曲といえば、ベートーヴェンなどの一部の例外を除くと、シューベルトの《冬の旅》と《美しき水車小屋の娘》にとどめをさすだろう。W. ミュラーの詩によるシューベルトの二つの連作歌曲集は、いずれも 60 分を超える大規模な作品である。各曲の規模も大きく、楽譜のページ数にしても 2~4 ページのものがほとんどである。

対して、シューマンの《詩人の恋》は、演奏時間は 35 分程度である。各曲も 1~2 ページがほとんどであり、1 曲の独立性が高いシューベルトの連作歌曲よりも、短い曲が次々に移り変わってゆく点に大きな特徴がある。

《詩人の恋》のもう一つの特徴は(これはまた同時にシューマン歌曲の特徴でもあるのだが)、ピアノ・パートの音楽的充実である。これは先述のとおり、シューマンが元来ピアノニストを目指していたことと無関係ではないだろう。シューベルト以上にピアノに多くの発言権が与えられ、音楽の流れ、雰囲気はピアノ・パートが主導してゆく。もはやシューマン歌曲に至っては、歌と伴奏ではなく、歌とピアノの二重奏、いな、ピアノ曲に歌の伴奏が付いている、といってもよいくらい、ピアノの存在が大きい。モーツァルト、ベートーヴェンの先駆を受けて、シューベルトが確立したドイツ・リートは、シューマンによってドイツ・ロマン派音楽の中心的存在になったと言ってよいだろう。《詩人の恋》はその代表的存在といっても過言ではない。

1 当時のドイツはプロイセン、バイエルン、プファルツなど、様々な王国が連立する連邦であり、政治体制としての統一国家ドイツは存在しなかった。